

フランス語の不定名詞句と総称解釈 Indefinite noun phrases in French and generic interpretation

東郷 雄二

0. はじめに

フランス語の不定名詞句には次のような解釈があるとされている。

- (1) a. 特定解釈 *spécifique*
Jean a acheté *un vélo*.
- b. 非特定解釈 *non-spécifique*
Jean voudrait acheter *un vélo*. Il va en acheter un demain.¹⁾
- c. 非指示的解釈 *non-référentiel*
Jean est *un professeur expérimenté*.
- d. 総称解釈 *générique*
Un soldat français résiste à la fatigue.

本稿ではこのうち総称解釈を中心に論じる。*un vélo*のように、不定冠詞単数形のついた名詞句を、以後は *un N* と呼ぶことにする。

un N の基本的意味は、直感的には「Nひとつ」であろう。それが総称解釈において「すべてのN」の意味になるのは、次のような理由によると考えられている。ここでは代表的な藤田(1985)を引用しておこう。

- 1) 名詞概念 *N* を非連続的に把握することによって、複数のメンバーを含む集合を設定する。
- 2) *un N* は 1) で構築された集合から任意のメンバーを抽出する。つまり、*un N* 文の言表内容はその集合から抽出された任意の一メンバーについて真となる。

集合論的に言えば、*N* は空でなくかつ singleton でない集合を想定し、*un N* はその集合から任意の元を抽出する (*extraction aléatoire*) ということになる。しかしこれだけでは総称解釈は出て来ない。結果的に総称解釈に至るのは、次のような意味効果が生じるからだとされる。

「*un N* においては、名詞概念は非連続的な把握を受けるが、*N* の外延をメンバーとして集合が構築され、さらに文内容がそのなかから任意の一メンバーについて真となるとき、「総称的な」*effet de sens* が生まれる。集合からどのメンバーを抽出しても文内容がその一つ一つについて真となるからである」(藤田 1985)

しかしこの説明には重要な点がいくつか欠けているように思われる。*un N* 総称文の一般形を "*un N P*" (*P*は述語) とすると、なぜ「*P*である*N*がひとつ存在する」という存在量化解釈が、総称の意味と平行して生じないのかというのが第一の疑問である。

このような疑問が生じるのは、Russell (1905) 以来伝統的に、不定名詞句は存在量化表現だと見なされて来たからである。

- (2) a. A dog came in.
- b. $\exists x [\text{dog}(x) \wedge \text{come-in}(x)]$

不定名詞句が存在量化表現ならば、Un chien est fidèle à son maître. のような総称文に対しても、存在量化解釈「PであるようなNがひとつ存在する」が可能はずだが、実際にはそうではない。存在量化解釈はどのようなメカニズムで排除されるのだろうか。

第二の疑問もこれと関連している。藤田(1985)の引用にあるように、un N 総称文では、「Nの任意の要素について述語が成り立つ」ことが総称的意味の源だとされている。言い換えればNのすべての要素について述語が成立するというのが総称の意味である。するとこれは全称量化子で表現されることになる。

- (3) a. Un mouton a quatre pattes.
b. $\forall x [\text{mouton}(x) \rightarrow \text{avoir-quatre-pattes}(x)]$

先にも述べたように、不定名詞句は伝統的に存在量化表現だとされてきた。ところが総称文においては、不定名詞句は全称量化に対応しているように見える。この存在量化から全称量化への転換はどのようにして起きるのだろうか。総称的意味がどのようにして得られるかを解明するためには、以上述べたような疑問に答えることが必要である。

本稿では、不定名詞句を存在量化表現だと見なすと、un N 総称文を正しく分析できないことから、不定名詞句を存在量化表現とせずこの問題を解決する方法を提案する。同時に un N 自体に総称的意味はなく、不定冠詞に総称読みを認める必要はないことを示す。また un N 総称文の特性を明らかにするために、フランス語で総称の意味を表す他の限定手段、le N / les N のような単数・複数の定冠詞つき定名詞句との比較分析を行なう。

1. 談話世界への定位操作

本節では不定名詞句の総称解釈からいったん離れて、存在量化解釈について予備的考察を行なう。

不定名詞句はどのようにして存在量化解釈を受けるのだろうか。直感的には、Une femme est entrée dans la salle d'attente. という文を解釈する際に、聞き手は「待合室に入って来た女がひとりいた」という意味のことを理解すると考えられる。この場合、不定名詞句 une femme は特定読みされるが、だからといって聞き手はそれがどの女なのかを知らないし、その女を一群の候補者のなかから指さして示すこともできない。聞き手にとってそれは、「待合室に入って来た」という過去の出来事によって特徴づけられる女にすぎない。この意味で、une femme は時間 t_1 に生じた特定の出来事 e_1 に従属したものとしてのみ認定される存在である。このとき une femme の指示対象は談話世界に「定位される」(localiser) と言うことにする。不定名詞句が存在量化読みされるためには、その指示対象が談話世界に適切に定位されなくてはならない²⁾。

定位に重要な役割を果たすのは文の述語である。ここでは Kratzer (1995) の分析に従って、局面レベル述語³⁾ の項構造には状況項 s が含まれているとしてみよう⁴⁾。局面レベル述語である entrer は個体項 x と状況項 s を取る二項動詞ということになる。個体項 x を特定の時空間に定位する働きは、状況項 s が担う。

- (4) a. Une femme est entrée.
b. $\exists s [\exists x [\text{femme}(x) \wedge \text{entrer}(x, s)]]$

このようにすると、une femme の存在は「入って来る」という出来事が起きた状況 s に含まれることになり、上に述べた「出来事に従属して認定される存在」という特性を、 s にかかる存在量化子の作用域として表現しているように見える。

しかし、これではまだ十分ではない。名詞述語 *femme* と動詞述語 *entrer* とが、同一の状況 *s* を共有していることが表現されていない。このような定式化の背景には、名詞述語の表すものは、時間に束縛を受けない恒常的存在であり、一方動詞述語の多くは動作を表し、時間に左右されるものだとする想定がある。ならば名詞述語の表すものは時間に関係なく存在するものとしておいて、動詞述語に含まれた *s* でのみ時空を限定すれば事足りるということになる。

本稿ではこのような想定は誤りであり、名詞述語にも状況項を持たせて、次のように分析するのが正しいと考える。

- (5) a. Une femme est entrée.
 b. $\exists s [\exists x [\text{femme}(x, s) \wedge \text{entrer}(x, s)]]$

これは「*s*において女であり、*s*において入って来た、そのような *x* が存在する状況 *s* が存在する」を意味する。この分析に抵抗を感じる人がいるとすれば、「*s*において女である」の部分だろう。「*s*において女である」ものは、その他のどの状況においても女であるはずなので、この指定は余剰だと感じられるかも知れない。

しかし、名詞述語にも状況項を設定する必要は、次のような例が示している。

- (6) Je me tuerai plutôt que d'épouser *un tel mari*. (Molière, *Avare*)
 「私は (こんな男を) 夫とするくらいなら死んだほうがましです」

これは修辞学で *métalepse* 「転喩」と呼ばれている技法である。目の前の男はまだ「夫」ではない。結婚して初めて夫になるのである。このように結果を先取りするのが転喩である。この文には先行詞が欠けているが、仮に *un homme* としておこう。また煩雑になることを避けるために *Je n'épouserai pas un tel mari*. と単純化すると、次のように表せる⁵⁾。

- (7) $\exists s \exists t [\exists x [\text{homme}(x, s) \wedge \text{mari}(x, t) \wedge \neg \text{épouser}(je, x, t)]]$

この意味は「今の状況 *s* の男 *x* が、別の状況 *t* では夫であり、その夫と私は結婚することはない」となる。*x* に相当する個体は、状況 *s* では *homme* であり、状況 *t* では *mari* であることに注目されたい。これは同一の個体が、異なる状況においては別々の形容・性格づけを受けることがあるという事実を反映している。同じことは次の例でも起きている。*la femme aux cheveux blancs* 「白髪の女性」と *la jeune fille actuelle* 「今の若い娘」とは、数十年の時を隔てた同一人物である。

- (8) Un connaisseur des êtres humains, la voyant, se serait assurément dit qu'il ne s'agissait pas là de charmes éphémères, mais qu'au contraire *la femme aux cheveux blancs* retiendrait l'attention de la même façon que *la jeune fille actuelle*. (Frank Wedekind, *Le vieux prétendant*)

名詞述語にも状況項を設定する分析⁶⁾では、このような例をうまく扱うことができる⁷⁾。またのちに詳しく述べることになるが、*un N* 総称の意味解釈のためには、名詞述語に状況項を設けることが必要になる。

以上のことを踏まえて、談話世界への不定名詞句の指示対象の「定位操作」を次のように定義する⁸⁾。ただし、*N* は名詞、*P* は述語である。

- (9) 不定名詞句は、 $\exists s [\exists x [N(x, s) \wedge P(\dots, x, \dots s\dots)]]$ の操作を受けるとき、談話世界にお

いて適切に定位される。

2. 局面レベル述語と個体レベル述語

局面レベル述語と個体レベル述語は、不定名詞句主語の許容度に大きなちがいがあることが知られている。不定名詞句主語に個体レベル述語を用いると、一般に容認度が低い。

(10) a. 局面レベル述語

Un enfant joue dans le jardin.

b. 個体レベル述語

? Un enfant est intelligent / grand / blond.

Kratzer (1995) のように局面レベル述語だけに状況項を設けると、このちがいをうまく説明することができるように見える。

(11) a. $\exists s [\exists x [\text{enfant}(x, s) \wedge \text{jouer-dans-le-jardin}(x, s)]]$

b. $\exists s [\exists x [\text{enfant}(x, s) \wedge \text{intelligent}(x)]]$

a. では $\exists s$ が名詞述語 *enfant* と動詞述語 *jouer dans le jardin* の両方に含まれた状況項 *s* を正しく束縛しており、前節(9)の定義に照らして定位が正しく行われている。ところが b. では個体レベル述語 *intelligent* に状況項がなく、 $\exists s$ によって束縛されていない。これが容認度の低さの原因であるとする事ができる⁹⁾。

Kratzer はまた次の例文をあげて、個体レベル述語には状況項がないことを主張している。always は量化副詞であり、個体変数 *x* も状況変数 *s* も束縛できる。a. にはそのどちらもないので空量化を起し排除される。b. と c. には個体変数 *x* が適格である。d. には個体変数はないが、局面レベル述語 *speak* に状況項 *s* を設けてあるので適格である。

(12) a. *When Mary knows French, she know it well.

*always [know (Mary, French)] [knows-well (Mary, French)]

b. When a Moroccan knows French, she knows it well.

always(x) [Moroccan (x) & know (x, French)] [know-well (x, French)]

c. When Mary knows a foreign language, she knows it well.

always (x) [foreign-language (x) & know (Mary, x)] [know-well (Mary, x)]

d. When Mary speaks French, she speaks it well.

always (s) [speak (Mary, French, s)] [speak-well (Mary, French, s)]

しかし本稿ではこの分析を採用しない。というよりもできないのである。なぜならすでに第一節で名詞述語に状況項を設定しているからである。名詞述語は典型的な個体レベル述語であり、名詞述語に状況項を認めておきながら、その一方で他の個体レベル述語に認めないのは一貫性を欠くことになる。

ところがその一方で、個体レベル述語に状況項を認めると、例(10)の容認度のちがいが説明できない。このジレンマを回避するために、本稿では Chierchia (1995) の分析に従うことにする。Chierchia は習慣文・総称文・個体レベル述語に同じ記述を与えることを提案している。

(13) a. John smokes Gen s [C (j,s)] [smoke (j, s)]

b. John is intelligent. Gen s [C (j,s)] [intelligent (j, s)]

この記述では [量化子] [制限部] [核作用域] の三分構造が用いられている¹⁰⁾。Gen は総称演算子 (generic operator) で、個体変数も状況変数も束縛できる。その意味論は全称量化子と類似するが、法的な力 (modal force) を持つ点が全称量化子と異なるとされている。この点についてはのちに触れる。

John smokes. のような習慣文を全称量化子で分析する問題点については、Kleiber (1985) でもつとに指摘されているが、全称量化子の量化の対象となる変数を何にするかが問題となる。これを仮に時間 t とすると、従来の記法では $\forall t [\text{time}(t) \rightarrow \text{smoke}(j) \wedge j \text{ is at } t]$ となり、「John はすべての t においてタバコを吸う」を意味するが、これは明らかに偽である。John は寝ている時や禁煙車両にいる時にはタバコを吸わないからである。全称量化子は明らかに強すぎるのである。

Chierchia はこの問題点を回避するために、制限部に「適切性条件」(felicity condition) を表す $C(x, s)$ を置く。Chierchia 自身はこの適切性条件の定義について詳しく述べることを避けているが、関数 C は個体変数 x と状況変数 s の組を項として取り、それを可能世界 (のセット) に写像すると考えられ、これが Gen の持つ modal force を表す。つまり、John は適切性条件に合致する状況 s においてのみタバコを吸うことになる。この適切性条件を明確に定義するのは現時点では困難で、語用論的に補われると考えられる。つまりわれわれは「John はタバコを吸う (喫煙者である)」と述べる時、寝ている時のように喫煙するのに妥当でない状況は、自然に念頭から除外しているということである。

Chierchia の提案で注目すべきは、intelligent のような個体レベル述語にも同じ記述が与えられている点である。個体レベル述語の状況項 s は Gen によって束縛されており、「John は (適切性条件に合致する) すべての状況において intelligent である」を意味する。このように個体レベル述語は語彙レベルにおいて Gen に束縛される結果として、個体の恒常的性質を表すことになる。

このようにすれば、?Un enfant est intelligent. のように個体レベル述語に不定名詞句主語がつくと容認度が低いことを説明することができる。不定名詞句 un enfant を談話世界に適切に定位しようとする時、(9)で示した定位操作を行わなくてはならない。

- (14) a. ?Un enfant est intelligent.
 b. $\exists s \exists x \text{ Gen } s [\text{enfant}(x, s) \wedge C(x, s)] [\text{intelligent}(x, s)]$

ところが、b. の式では状況項 s が存在量化子と総称演算子の両方に束縛されており、矛盾する内容を表している。その結果、定位操作ができなくなり、不定名詞句の指示対象が談話世界に適切に定位されなくなる。このため a. は容認度が低くなると考えられる。

3. 総称的不定名詞句の意味解釈

ではここまでの考察を踏まえて、本題である総称的不定名詞句の意味解釈に移ろう。総称文には(15)のように局面レベル述語を持つものも、(16)のように個体レベル述語を持つものもある。

- (15) a. Un castor construit des barrages.
 b. Un lapin se reproduit en moyenne tous les six mois.
 (16) a. Un chien est fidèle à son maître.
 b. Un boxeur doit combattre.

フランス語には現在形に、英語のような習慣的現在 (ex. John smokes) と現在進行形 (ex. John is smoking) の区別がないので、Un castor construit des barrages. のように現在時制の文は、

どちらの意味とも取ることができる。もし現在進行形の意味に取るならば、次の意味解釈になる¹¹⁾。

(17) $\exists s [\exists x [\text{castor}(x, s) \wedge \text{construire-des-barrages}(x, s)]]$

これは発話の時点においてダムを作っているビーバーがいることを意味する存在量化解釈である。ここで状況項 s に値を付与するのは述語の時制である。現在形の述語 $\text{construit des barrages}$ が、発話の時点 t_0 という値を指定することによって、状況項 s は具体的な値を取ることができる。これによって un castor の存在量化解釈を得る。

ところが述語の時制が習慣的現在だとすると、 castor の指示対象は定位できなくなる。習慣的現在時制は特定の時点 t を指定しない。このため状況項 s は値を取ることができず、この結果、式の中の $\exists s$ は効力を持たなくなり、それに従属する $\exists x$ もまた無効となる。存在量化解釈に代わって総称解釈を得るには、次の操作が必要になる。

(18) 不定名詞句主語の存在量化解釈ができないときは、 $\exists s$ を $\forall s$ に、 $\exists x$ を $\forall x$ に書き換えよ

これにより、伝統的記法を用いれば次の式を得る。

(19) $\forall s [\forall x [\text{castor}(x, s) \rightarrow \text{construire-des-barrages}(x, s)]]$

この意味するところは、「ダムを作っている一匹のビーバー」(=存在量読み)を可能にする極小の状況 s が存在しないときは、ビーバーの存在領域を最大解釈せよということである。存在領域が最大解釈されるのにもなって、ビーバーの存在読みは全称読みへと転換される。ここでビーバーの全称読みへの転換を引き起こしているのが、存在領域の最大解釈(= $\forall s$)であるという点が重要なポイントである。

これを三分構造に書き換えると次のようになる。

(20) $\text{Gen } s, x [\text{castor}(x, s) \wedge C(x, s)] [\text{construire-des-barrages}(x, s)]$

この意味は、「(適切性条件を満たす)すべての状況 s において、(適切性条件を満たす)すべてのビーバーはダムを作る」となり、総称の意味を正しく表している。

(18)の操作の前提条件として、不定名詞句 $\text{un } N$ は常に存在量化子に束縛されるわけではないことを認める必要がある。Russell (1905) 以来、不定名詞句は存在量化表現だとされてきたが、もし常にそうだとすると、上に行なった $\text{un } N$ 総称文の意味解釈ができなくなる。不定名詞句はそれ自体としては存在量化表現ではなく、その存在量化解釈は談話レベルの要因によって導出されると考えるのが妥当である¹²⁾。

では次に個体レベル述語を持つ総称文を見てみよう。

(21) $\text{Un chien est fidèle à son maître.}$

個体レベル述語 $\text{fidèle à son maître}$ は、すでに前節で述べたように状況項を持つと考えるが、それは語彙レベルで Gen に束縛されている。このため(21)は次のような記述を受けることになる¹³⁾。

(22) $\text{Gen } s [\text{chien}(x, s) \wedge C(x, s)] [\text{fidèle-à-son-maître}(x, s)]$

しかしこれは適格な意味記述ではない。制限部と核作用域の変数 x がともに束縛されずに残っているからである。かといって x を束縛するために $\exists x$ を付け加えるのも妥当ではない。仮に $\text{Gen } s [\exists x [\text{chien}(x, s) \wedge C(x, s)] [\text{fidèle-à-son-maître}(x, s)]]$ とすると、「(適切性条件を満たす)すべての s に犬が一匹存在する」というありえない意味になってしまう。このままでは un chien の指示対象は、(9) に示した意味で談話世界に適切に定位されなくなる。残る可能性は、先ほど局面レベル述語の総称文で、 $\exists x$ を $\forall x$ に書き換えたように、変数 x を Gen の指標として複写し、 Gen に束縛されるようにすることである。

(23) $\text{Gen } s, x [\text{chien}(x, s) \wedge C(x, s)] [\text{fidèle-à-son-maître}(x, s)]$

これにより「(適切性条件を満たす)すべての s において、(適切性条件を満たす)すべての x は飼い主に忠実である」という総称の意味を得る。ここでもやはり、不定名詞句 un chien は、存在量子子ではなく Gen によって束縛されることを認めなければならない。

4. 総称演算子の意味論

4.1. 述語の容認度と適切性条件

ここまでは Chierchia (1995) の提案に従って、総称演算子 Gen の意味を「全称量化プラス modal force」と、やや直感的に定義して使ってきた。この節では総称演算子の意味論をもう少し詳しく見ることにしよう。

Chierchia は Gen の制限部に入る適切性条件 $C(x, s)$ について、次のように考えている。

(24) a. John knows Latin. $\text{Gen } s [C(j, s)] [\text{know}(j, L, s)]$
 b. John is a smoker. $\text{Gen } s [C(j, s)] [\text{smoker}(j, s)]$
 c. John is intelligent. $\text{Gen } s [C(j, s)] [\text{intelligent}(j, s)]$

このような個体レベル述語の場合、述語が成立する条件について、特に具体的な指定を必要とせず、 C の内容は単に "be in s " のような locative relation であれば十分である¹⁴⁾。言い換えれば、「John がラテン語ができる」とか「John は愛煙家である」という事態が成立するために、特に語用論的に満たされなくてはならない外的条件が必要となるわけではないということである。

$\text{un } N$ 総称文の場合、問題なく容認度が高いのは、本質的特徴を表す述語 (Lawler 1973)、定義を表す述語 (Corblin 1987)、必要条件を表す述語 (Galmiche 1983) もしくは規範的意味の述語であるとされている。

(25) a. A madrigal is polyphonic.
 b. ?A madrigal is popular. (Lawler 1973)
 (26) Un carré a quatre côtés. (Corblin 1987)
 (27) Un mouton a quatre pattes. (Galmiche 1983)
 (28) Un enfant se tait à table. (Kleiber 1989)

この基準に合わない述語では容認度は一様ではないが一般に低くなることが多い¹⁵⁾。

(29) a. ?Un vélo est utile. (藤田 1985)
 b. ?Une conférence est ennuyeuse. (Ibid.)
 c. ?Un chat est affectueux. (Muller 1987)

d. ?Un singe est amusant. (Kleiber 1981)

このタイプの述語は、主語に指示形容詞 ce/ces を付けることができるという特徴がある。un N 総称文で容認度の高い述語に ce /ces を付けると、例えば (30)a. では「辺を4つ持たない四角形」があることを前提とするので、前提自体が偽になり容認されない。

- (30) a. *Ces carrés ont quatre côtés.
b. *Ces moutons ont quatre pattes.
(31) a. Ces vélos sont utiles.
b. Ces chats sont affectueux.

(25)~(28)の述語については、Chierchia が個体レベル述語の know Latin / be a smoker / be intelligent について述べていたことがそのまま当てはまる。

- (32) a. Un mouton a quatre pattes.
b. Gen s,x [mouton (x,s) \wedge C(x,s)] [avoir-quatre-pattes (x,s)]

この総称文が成り立つための適切性条件 C(x,s) の具体的内容はほとんど空であり、in (x, s) の locative relation さえ満たせばよい。羊はどんな状況に置かれても足は4本なのである。

しかし、(29)の述語はそうではなく、それが総称文として容認度が低い理由だと思われる。

- (33) a. ?Un vélo est utile.
b. Gen s,x [vélo (x,s) \wedge C(x,s)] [utile (x,s)]

羊は事故に遭った個体や生まれつき奇形の個体を除外すれば、どのような状況にあっても足は4本である。しかし、自転車はどのような状況でも便利だというわけではない。雨や雪が降っている時や、交通の激しい都心や、自分が足を折ってギプスをしている時は、便利だとは言えない。言い換えると、述語が成り立つために必要な適切性条件 C(x,s) の比重が羊の例に較べて重く、その具体的内容がわれわれの持つ語用論的知識によってたやすく推測されないときに、un N 総称文の容認度は下がるのだと考えることができる。

このように考える傍証として、C(x,s) の内容を豊かにしてやると、容認度が向上する事実をあげることができる。

- (34) a. ?Un vélo est utile. (藤田 1985)
b. Un vélo est utile à la campagne. (Ibid.)
Gen s,x [vélo (x,s) \wedge C(x,s) \wedge à-la-campagne (x,s)] [utile (x,s)]
(35) a. ?Un homme est courageux. (Ibid.)
b. Un homme est courageux lorsqu'il en ressent la nécessité. (Ibid.)

à la campagne のような状況補語、lorsqu'il en ressent la nécessité のような従属節は、制限部に入って C(x,s) の内容をさらに限定する作用がある。言い換えると、un vélo の存在領域として可能な s の集合を小さくする働きがある。この結果、「すべての自転車」について「便利だ」という述定を行なうのではなく、「田舎にあるすべての自転車」について「便利だ」と述べることになる。これは自転車が存在する可能世界の集合を狭めることになり、その結果総称文として解釈しやすくなるのである。

4.2. 全称量化分析の問題点と適切性条件

制限部の $C(x,s)$ の持つ modal force についてもうひとつ考えておかななくてはならない問題がある。総称文を全称量化子によって分析する際の問題点のひとつとして、全称量化子は強すぎるという点があげられてきた。

- (36) a. A lion has a mane.
b. A bird lays eggs.
c. A symphony has four movements.

たてがみがあるのは雄のライオンだけであり、卵を産むのは雌の鳥だけで、交響曲のなかには楽章が4より多いものも少ないものもある。にもかかわらずそのような例外の存在が、上にあげた総称文を偽としない以上、全称量化子 $\forall x$ による分析は適切を欠くという議論である。

この問題を解決するためにさまざまな仮説が提案されてきた。総称文の述語はすべての個体にではなく「関与的な個体」だけに適用されるとする Relevant qualification 説 (Declerck 1991)、総称文では述語はプロトタイプ的な個体に適用されるとするプロトタイプ説 (Hempel & Oppenheim 1936 ; Galmiche 1985)、総称文はステレオタイプな知識を表しており真偽は問題にできないとする説 (Geurts 1985 ; Declerck 1986 ; Putnam 1970)、総称文は可能世界において解釈されるとする説 (Dahl 1975 ; Nunberg & Pan 1975 ; Delgrande 1987) などがある。

本稿では Chierchia (1995) に従って、総称演算子 Gen と適切性条件 $C(x,s)$ の組み合わせにより総称文を扱っている。このうち適切性条件 $C(x,s)$ が、上に指摘した全称量化に伴う問題点を回避するのに役立つ。この条件が、今まで提案された仮説のなかの Relevant qualification と可能世界における解釈の両方の機能を果たすと考えられる。ただし、これについてはさらに細かい議論が必要であり、紙幅の関係でここでは問題の所在を指摘し、方向を示唆するに留めたい¹⁶⁾。

5. le N 総称、les N 総称

フランス語では総称の意味を表すのに、un N 以外に次の手段がある¹⁷⁾。便宜上、定冠詞単数形を le N、定冠詞複数形を les N と呼ぶことにする。

- (37) a. *Un castor construit des barrages.*
b. *Le castor construit des barrages.*
c. *Les castors construisent des barrages.*

これらはともに総称と呼ばれているが、その意味するところは同じではなく、また名詞句が総称読みされる経路も異なっている。紙幅の余裕がないので、あまり詳しく論じることはできないが、un N 総称の性格を明らかにするために手短かに見ておく。

un N / le N / les N には次のようなちがひがあることが知られている。まず、Perlmutter (1970) が指摘したように、N のクラス全体についてしか成り立たないような「類述語」(prédicat de classe ; 英 kind predicate) は、le N / les N にしか使えない¹⁸⁾。

- (38) a. **Une dronte est éteinte.*
b. *La dronte est éteinte.*
c. *Les drontes sont éteintes.*

ここから un N は le N / les N と異なり、「類」(kind) を直接にさすことができないことがわかる。a. が非文なのは次のように説明できる。

- (39) a. *Une dronte est éteinte.
b. Gen s, x [dronte (x,s) ∧ C(x,s)] [éteint (x,s)]

この式は、「(適切性条件を満たす)すべての s において、(適切性条件を満たす)すべての x について éteint という述語が成り立つ」ことを意味する。しかし、これは意味をなさない。なぜならば、ひとつひとつの x = dronte について、絶滅したかどうかを検証することはできないからである。「絶滅する」という述語は、個々の個体について成立する事態ではない。それは「類」kind か、あるいは個体の集合としてのクラスにしか成立しない。ここから un N は「量化の結果として総称的意味を持つ」ことがわかる。本来 un N には総称の意味はないのである。これにたいして le N / les N の総称読みには、量化が働いていないと考えられる。

また un N は等位接続することができない¹⁹⁾。

- (40) a. *Un castor et une loutre construisent des barrages.
b. Le castor et la loutre construisent des barrages.
c. Les castors et les loutres construisent des barrages.

この理由は次のようなものだと思われる。Un castor construit des barrages. ならば、これは(適切性条件を満たす)すべての s における、(適切性条件を満たす)すべての castor について一般化である。「すべての x」をチェックするには、x のクラスが構築されなくてはならない。ところが un castor et une loutre と等位接続されると、これは「一匹の castor と一匹の loutre」からなるペアを形成する。このようなペアは、総称演算子 Gen の行なう一般化の操作の前提となる自然なクラスを形成しない。このために非文になると考えられる。

un N は総称ではない文において、総称名詞句として用いることができない。

- (41) a. Aujourd'hui, je vais vous parler d'un castor.
b. Aujourd'hui, je vais vous parler du castor.
c. Aujourd'hui, je vais vous parler des castors.

b. の le castor と、c. の les castors は総称読みができる。ところが a. の un castor は特定読みしかできない²⁰⁾。この事実は示唆的である。le N / les N は文の述語と関係なく総称の意味を持ちうるが、un N が総称読みできるかどうかは、文の述語に依存していることを示している。un N 自体には総称の意味はないのである。総称の意味を持つためには量化されなくてはならない。この例もまた le N / les N は量化がなくても、総称の意味を持つことができることを示している。

紙数が尽きてきたので詳しく論じることはできないが、un N と比較した場合の、le N / les N 総称は次のように特徴づけられる。

- (42) le N は共有知識として確立した「類」(kind) をさす。les N は複数の個体を含む「クラス」をさし、これは共有知識として確立した「類」でなくてもよい。

ここではこの見解を指示する例をいくつかあげるに留める。

- (43) a. Les chats ont peur de moi.
 b. *Le chat a peur de moi. (Léard 1987)
- (44) a. Les chats siamois sont intelligents.
 b. Le chat siamois est intelligent.
- (45) a. Les chats blancs sont chétifs.
 b. ?Le chat blanc est chétif. (Kleiber 1989)

6. おわりに

本稿では不定名詞句 un N が総称読みされるプロセスを考察し、次の点を明らかにした。un N は談話世界に定位されることによって存在量化読みを受けるが、その際に重要な役割を果たすのは述語に含まれた状況項である。un N が極小の状況に定位できないとき、その存在領域を最大解釈することによって、量化を通じて総称読みが導かれる。この操作を可能にするには、不定名詞句が常に存在量化表現であるとする見方を改めなくてはならない。また総称文の意味解釈を記述するためには、個体レベル述語にも状況項を設定する必要があることを示した。

un N には本来総称の意味はなく、量化の結果総称の意味を得るため、類 (kind) を直接にさすことができない。この点が le N / les N など他の総称名詞句との重要なちがいである。

本稿で詳しく論じることができなかったのは、Un enfant se tait à table. のような規範的意味を持つ総称文である。規範的意味は言うまでもなく法的 (modal) 意味のひとつであり、総称文とモダリティーの関係をさらに分析する必要がある。この過程で本稿では十分に定義できなかった適切性条件 $C(x, s)$ の働きが、さらに明らかになると思われる。また注 (17) でも触れた des N を持つ、Des diplomates doivent être discrets. 型の総称文にも規範的な意味があるとされており、この問題はまた稿を改めて論じたい。

【注】

*本研究は文部科学省科学研究費 (基盤研究 (C) 課題番号10610513) の補助を受けて行われた。本論文は、平成13年9月29日に早稲田大学で開かれた日本フランス語学会195回例会での発表をもとにしているが、内容には大幅に手を加えた。またこのときの発表について、酒井智宏氏 (東京大学大学院・総合文化研究科博士課程) から有益なコメントをいただいたことに感謝したい。酒井氏には形式意味論に不慣れな筆者の誤りを指摘していただいた。

- 1) Jean voudrait acheter un vélo. の不定名詞句 un vélo は、法助動詞 vouloir の形成する不透明な文脈内にあるので、特定読みと非特定読みの両方が可能である。後続する文で代名詞 en で照応されていることにより、非特定読みが決まる。
- 2) Danon-Boileau (1989) は、文を énoncé événementiel 「出来事文」と énoncé de type propriété 「属性文」に大別し、出来事文 Un étudiant m'a téléphoné. においては、不定名詞句主語 un étudiant の存在は出来事 a téléphoné の起きた時点 t_1 を適用することで認定されると述べている。本稿の考察はこの Danon-Boileau の分析を採用し、それをより精密化しようとする試みである。
- 3) 局面レベル述語 stage-level predicate と個体レベル述語 individual-level predicate の区別については、Carlson (1977) を参照。
- 4) ここで状況項と呼んでいるのは、Davidson がイベント項 e と呼んでいるものと実質的に同じものと見なしてさしつかえない。
- 5) この文には別の表現も可能である。

$\exists s \rightarrow \exists t [\exists x [\text{homme}(x, s) \wedge \text{mari}(x, t) \wedge \text{épouser}(je, x, t)]]$

この意味は「今の状況 s で男である x が、夫となり私とその夫と結婚するような状況 t は存在しない」となる。

6) Carlson (1977) の存在論的分析では、個体 (object) は時間に束縛されない存在であるが、*A man came in.* のような出来事を表す文において、*a man* は object に実現関数 (realization function) をかけて得られる、存在の時間的切片としての局面 (stage) だとされている。

$\exists x [R(x, \text{man}) \wedge \text{came-in}(x)]$

R は object としての *man* からその stage への写像関数である。stage レベルの存在は時間パラメータの支配を受けることになり、結果的には名詞述語に状況項を設定する本稿の分析と同じ効果を持つことになる。

7) *métalepse* 的指示は、メンタル・スペース理論でも同じようにうまく扱うことができる。この文では *la jeune fille actuelle* は「現在スペース」に、*la femme aux cheveux blancs* は「未来スペース」に書き込まれて、両者が同一性コネクタで結合されているとすればよい。メンタル・スペース理論で、同一の指示対象を持つ名詞句が、異なるスペースに書き込まれることを認めていることは、本稿の分析において名詞句に状況項を設定していることと同じ効果を持つ。

8) (9) に述べた定位操作の適切性は、実際の談話構築にあたっては必要条件であり十分条件ではない。会話フランス語では不定名詞句主語は極めて少ないことが知られている。

Jeanjean (1981) によれば、わずかに観察される例には共通の興味深い特徴がある。不定名詞句主語の前に、場所・時間の副詞句を持つ例が多いのである。

i) *mais tout-à-coup un vilain monsieur attrapa le pauvre petit Didou*

ii) *ainsi hier un homme politique disait je ne peux pas parler avec un ministre qui n'a pas de gouvernement*

この場所・時間の副詞句は状況項を含み *tout-à-coup* (s) となって述語と結びつくが、その文中での存在が出来事読みに必要な状況の設定を促進していると考えられる。この事実は、不定名詞句の存在量化読みにおける、状況の設定が持つ重要性を示している。

9) 実際には Kratzer は名詞述語に状況項を認めていないので、 $\exists s [\exists x [\text{enfant}(x) \wedge \text{intelligent}(x)]]$ となって、 $\exists s$ は束縛するものがなく空量化を起こして排除される。

10) 三分構造 *tripartite structure* については、Heim (1982), Diesing (1992) を参照。

11) 煩雑になることを避けるために目的語 *des barrages* はあえて述語の一部として記述した。すべてを書くと $\exists s [\exists x \exists y [\text{castor}(x, s) \wedge \text{barrage}(y, s) \wedge \text{construire}(x, y, s)]]$ となる。

12) Heim (1982) のファイル変換意味論や、Kamp & Reyle (1993) の談話表示理論においても、不定名詞句は存在量化表現ではなく、単に変数 x を談話に導入するだけだとされている。

これらの理論は主としてロバ文 (*donkey sentence*) に見られる代名詞照応のパラドックスを解決するために提案されたもので、本稿で扱っている総称の問題を射程に納めたものではないが、不定名詞句を存在量化表現とは見なさないという点で一致した結論を出している。

13) 以下の分析では *son maître* の照応的所有形容詞 *son* の意味がどのように得られるかという問題は無視する。

14) Chierchia (1995 : 199)

15) 英語では Nunberg & Pan (1975) が、**A porkchop is tender. / *A programmer is smart.* を非文としている。

16) この問題の解決の試みは Kratzer et al. (1995 : 52) を参照。

17) フランス語の限定詞のなかでは、不定冠詞複数の *des* だけは総称の意味を表すことができないと言われている：**Des baleines sont des mammifères.* その理由は、*des* にはその歴史的由来からして、本来「集合全体の部分」という意味があり、総称の意味と相容れないからだとしている。しかし、Attal (1976), Corblin (1987), Léard (1987), Carlier (1989), Laca & Tasmowski-de Ryck (1996) は、*Des diplomates doivent être discrets.* のような *des N* 総称の例が

あることを指摘している。本稿では紙幅の都合でこの問題は扱わない。また、Pierre qui roule n'amasse pas mousse. のような無冠詞名詞もここでは考えない。

18) ただし、Une dronte est éteinte. は、une dronte に下位類 (sub-kind) 読みを与えれば容認される。つまり、ドードー鳥にはいくつもの下位類があり、その一種が絶滅したという読みである。

19) Perlmutter (1970)

20) この場合も un castor に下位類読みを与えることは可能である。

【参考文献】

- Attal, P. (1976) "A propos de l'indéfini des : problèmes de représentation sémantique" , *Le français moderne* 44-2, 126-142.
- Carlier, A. (1989) "Généricité du syntagme nominal sujet et modalités." , *Travaux de linguistique* 19, 33-56.
- Carlson, G. (1977). *Reference to Kinds in English*. Ph.D. Thesis, University of Massachusetts.
- Carlson, G. & Pelletier, F.J. (eds) (1995) *The Generic Book*, The University of Chicago Press.
- Chierchia, G. (1995) "Individual-level predicates as inherent generics", in G. N. Carlson & F. J. Pelletier (eds) (1995) 176-223.
- Corblin, F. (1987) *Indéfini, défini et démonstratif*, Genève-Paris, Droz.
- Dahl, Ö. (1975) "On generics", E. Keenan (ed) *Formal Semantics of Natural Language*, 99-111, Cambridge University Press.
- Danon-Boileau, L. (1989) "La détermination du sujet" , *Langages* 94, 39-72.
- Declerck, R. (1986) "The manifold interpretation of generic sentences", *Lingua* 68, 149-188.
- Declerck, R. (1991) "The origins of genericity", *Linguistics* 29, 79-102.
- Delgrade, J. (1987) "A semantics for defaults using conditional logic", *Artificial Intelligence* 33, 105-130.
- Diesing, M. (1992) *Indefinites*, MIT Press.
- 藤田知子 (1985) 「 un N génériqueについて」 , 『フランス語学研究』 19, 1-21.
- Galmiche, M. (1983) "L'utilisation des articles génériques comme mode de donation de la vérité" , *LINX* 9, 29-87.
- Galmiche, M. (1985) "Phrases, syntagmes et articles génériques" , *Langages* 79, 89-117.
- Guerts, B. (1985) "Generics", *Journal of Semantics* 4, 247-255.
- Heim, I. (1982) *The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases*, Ph. Thesis, University of Massachusetts.
- Hempel, C. & Oppenheim, R. (1936) *Der Typusbegriff im Lichte der neueren Logik*, Sijhoff.
- Jeanjean, C. (1981) "L'organisation des formes sujets en français de conversation. Etude quantitative et grammaticale de deux corpus", *Recherches sur le français parlé* 3, 99-134.
- Kamp, H. & Reyle, U. (1993) *From Discourse to Logic*, Kluwer Academic Publishers.
- Kleiber, G. (1981) *Problèmes de référence : descriptions définies et noms propres*, Paris, Klincksieck.
- Kleiber, G. (1985) "Du côté de la généricité verbale : les approches quantificationnelles", *Langages* 79, 61-88.
- Kleiber, G. (1989) "Comment traiter le générique?" , *Travaux de linguistique* 19, 145-170.
- Kratzer, A. (1995) "Stage-level and individual-level predicates", in G. N. Carlson & F. J. Pelletier (1995) 125-175.
- Kratzer, A. et al. (1995) "Genericity : an introduction", in G. N. Carlson & F. J. Pelletier (1995) 1-124.
- Laca, B. & Tasmowski-de Ryck , L.(1996) "Indéfini et quantification" , *Recherches linguistiques de Vincennes* 25, 107-128.

- Lawler, J. (1973) "Studies in English Generics" , *University of Michigan Papers in Linguistics* 1.
- Léard, J. M. (1987) "Quelques aspects morpho-syntaxiques des syntagmes et des phrases génériques", G.Kleiber (ed) *Rencontre(s) avec la généricité*, Paris, Klincksieck. 133-156.
- Muller, C. (1987) "A propos de l'indéfinie générique", G.Kleiber (ed) *Rencontre(s) avec la généricité*, Paris, Klincksieck. 297-234.
- Perlmutter, D. (1970) "On the article in English", M. Bierwisch & K. E. Heidolph (eds) *Progress in Linguistics*, The Hague, Mouton. 233-248.
- Putnam, H. (1970) "Is semantics possible?", H.E.Kiefer & M.K.Munitz (eds) *Language, Belief and Metaphysics*, 50-63, State University of New York Press.
- Nunberg, G. & Pan, C. (1975) "Inferring quantification in generic sentences", *CLS* 11, 412-422.
- Russell, B. (1905) "On denoting", *Mind* 14, 479-493.